
なごり雪

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なごり雪

【Nコード】

N3580Y

【作者名】

まめ太

【あらすじ】

恋人に逃げられる話。BL。エッチイ表現はぶった切りしたので期待しないでほしい。

「さよなら……、篤志。」

もお、会わへんやるけど……元気だな。」

ようやく手に入れた自由の翼を広げて、籠の鳥は逃げ去ってゆく。縛り付けてきた事や、捕らえ続けていた事を、ようやく噛み締める。

でも、心は戸惑うばかりで、どうしたらいいのかも解からない。

「そやな……。」

なんやかんやで、俺等、ずうっと一緒やったのにな。」

こんな風に別れがやって来るとは、思いもしなかった。

彼は、ずっと傍に居るものと、決め付けていたのに。

「千尋に、よろしく言つといてな。俺の事、気にしとつたら、かなんから。」

三角関係の果てに、身を引いた……傍から見れば、そう見えたくも知れない。薫は、篤志と同棲していたから、普通に見ればそう思っただろう。

でも、実際は違った。

新しい興味の対象を得た篤志から、薫はようやく逃げ出すことが出来た、というのが本当。

心理学とか、病理学とか。難しい話で説明するなら、そういう事。

篤志はこの日、ずっと捕まえていた小鳥に逃げられた。

ほんの、五分前まで、そうとは気付かずになっていたのに……。

ただの、一時的な帰省だと思っていたのは、篤志だけだ。

ほんの、五分前の会話が思い出された。

景色はそろそろ白いほどに白く、季節は真冬。落ちてきそつな曇天。

「あ、雪や。」

日曜日、午前六時二分。東京駅へ向かう電車のホームで、内藤薫は呟いて、ひらひらと舞い落ちる白いカケラを掌に受け止めた。その辺のアイドルよりも質の高い整った顔立ちで、薄く開いた唇は、薔薇の花びらのように可憐に見えた。漆黒の髪、とても濃いブラウンの瞳。

その瞳が、舞い落ちる雪をのんびりと眺めていた。隣で暇を持て余すように、ポケットに突っ込んだ手を出そうともしない、同年の少年……新塚篤志は寒そうに肩を震わせている。

鋭い視線の先に、遠く、線路の行く宛てを思い馳せるように、目を凝らす。

冷たい印象の強いその顔も、かなりの美貌で、さぞ周りが煩いだろうと思わせる。絵に描いたような少年二人の構図。

「春休み終わる前に戻って来いや。部屋もなんも、そのままやからな。」

仏頂面で自身の要求だけを手短かに伝える。

どこか命令口調なのは、篤志の口癖のためだけではなかった。

ずっと……、篤志は薫を意のままに動かし、支配してきた主だ。

その関係は数年来続いていて、崩れることのないもののようにも見えた。

「なあ、薫。この前、高岡にもろたチケット……使おてまうで。ええか？」

「うん、ええよ。……どうせ、俺、観に行かれへんし。」

諦めまじりの静かな口調で、薫は答えた。体裁は質問形式に見えて、本当のところは命令だ。篤志は薫に遠慮をした試しなどない。その二枚組みのチケットを、他の誰と使うつもりなのかも、もう知っている。

「帰る前には連絡遣せや、ええな？」

強気な言葉で、そう念を押すのにも理由があった。今、篤志は年下の可愛い少年、千尋を口説いている。……鉢合わせは拙い、そういう意味だった。

そして。

この時に薫は、口を開き、別れを切り出した。

薫と篤志は高校二年生。親元を離れ、二人でマンションを借りて住んでいる。

篤志の親は金持ちだし、都心の高級マンションを息子に貸し与えるくらいは造作もないらしい。

二人は幼馴染で、高校進学までは大阪に住んでいた。

薫は小さい時から、おとなしくて可愛くて、頭も良かったので、よく近所の子供たちの標的にされた。それを、篤志がいつも守ってやっていた。

ちらちらと舞い落ちてきた白い花弁を、なにげなく手のひらで受け止める薫。

大阪ではあんまり見いへんよなあ、と独り言のように呟いた。

他には誰も居ない東京駅のプラットホーム。

「ちいちゃい頃から、お前は泣きミソやったなあ……。」

「ほとんど、篤志に泣かされてたんやで？」

薫はそわそわと電車が到着するのを、待っている。気持ち揺らいだり、篤志に気付かれたりしない為に、朝、早くに出過ぎた事を後悔した。

早朝のプラットホームには、二人の他に人影はなくて……。

なんだかこのまま、無理矢理引きずって、連れて帰られるような気がして、怖かった。勇気を奮い起こして、今、ここに立っているのに。

「俺、そんなに泣かした覚えないで。お前の勘違いちゃうん？」

この期に及んでもなお、非を認めない篤志の姿は、なんだか滑稽で、薫は薄い笑みを浮かべる。

篤志は、その表情にどきり、とした。

ちらちらと、舞い落ちる雪。天が流す、凍った涙。

小さい時から、篤志は薫を守るナイトだった。どんな敵からでも守ってやった。

守って、というには御幣があるかも知れない。

単純に、他の子供が薫を虐めるのは許せないだけだ。

篤志はよく薫を虐めた。他の子供から守ってやった後に、拳骨で殴って泣かせたりもした。

『うえ〜ん……、篤くんが、殴った〜!!』

『馬鹿！ お前が弱いから、鍛えたってんのや!』

当時から、薫を泣かせる事が、至上の快樂だった。

薫の泣き顔を見ると、心がとても高揚してイイ気持ちになった。

だから、ほとんど毎日、薫を虐めて、虐めて、虐め抜いた。

他の子供にはいつさい、触らせずに……。

夏が近付けば、思い出す事件がある。

まだ肌寒い六月の中頃。無理矢理、薫を連れ出して、小学校の裏にある森へ肝試しに向かった事がある。

鬱蒼と繁り、昼もなお暗いその森の奥には、化け物が棲むと噂されている池があつて、肝試しの名目で無理矢理連れ出した薫を、篤志はこの池に突き落としたのだ。

理由といえば些細なもので、当時も、大人達に酷く叱られてもなお、その理由は話さなかった。薫が泣かないから、という単純な理由だが、その、度を越した執着心には誰も気付かないままに終わった。

最終的に、薫は大泣きして満足だし、本当は少し反省もした。

当時ですでに、薫の相手をしてくれる子供は、篤志しかいなくなっている。ガキ大将の篤志に睨まれる事を恐れて、誰も薫には近寄らない。

独りは寂しい。薫は虐められても、篤志を頼るしかなくなっていた。

『怖いやろ、薫う〜？ 泣かへんのか〜？』

『だ、大丈夫やもん……、ダイ、ジヨブ、』

真っ青になつても、まだ、涙も浮かべない薫の表情を、篤志はムツとして睨む。

さつきも、わざと大声を出して嚇かしてやったのに、やはり、薫は泣かなかつた。

『薫う〜、無理しんとけや。泣けばええやろ、そしたら、帰つたるで？』

『怖、ないもん、……平気やもん、』

何度、誘いかけても、薫は泣かなかつた。泣かないというより、恐怖のあまり、そんな余裕などなかつた。

鬱蒼と暗い森。時折り聞こえる無気味な鳴き声。

篤志に腕をしっかりと捕まえられて、薫は震えながら、引つ張られて。

なぜ、こんな所へ来るハメになったのかも覚えてはいなかつたけれど……、篤志の力強い手の温もりに励まされて、なんとか恐怖に耐えて歩いている。

『ほら、おどろ池に着いたで！ お化けが出るんやと〜。』

怖いなあ、なあ、薫？』

今度こそは泣き出すだろうと振り返つたのに、やはり薫は泣いてはいなくて。

ムツとしたついでに、池の中へと突き飛ばした。

『や……、がぼ、……助け……！』

さんざんに池の水を飲み、冷たい水の中で溺れて……引き上げようにも、水の中の薫に手が届かなくて。

やっと、自身のしたコトの重大さを思い知った。

なのに、どうにか助け出した時には、すっかり喉元を過ぎたナン
ト力で、泣きじゃくる薫の姿に満足する。そして、細い身体を抱い
て感じた奇妙な思い。

ドキドキと。心臓の音が響いてくるのは、とても気持ちがいい。

濡れた服を通して伝わる、薫の肌に初めて欲情した。

俯いたままの薫の横顔……盗み見るように視線を向けて。最後だというのに、沈黙は重たくも息苦しくもなく……失ってしまうのだと言うことを、心が理解してくれない。

「……煙草、買おてくるわ。」

居た溜まれずに逃げ出そうとすると。

「あ、俺、持つてるで。」

自然に、薫の鞆から魔法のように出てくる。薫は煙草を吸わないのに。

行ってしまう……、

受け取った時の手の白さが、目に焼きついた。

この白い手が、篤志の背中に廻されて……そんな風に、幾千の夜を過ごして来たはずなのに……。

初めて、薫に興味を覚えたあの日から、

次第に篤志の行動はエスカレートしていった。

テレビに影響されて、薫を部屋で裸にした。見よう見真似のキス。小学生の時から、こんな具合だったのだから、二人が一線を越えるのも、早かった。

中学生になると、篤志と薫の力の差は歴然とし、ますます薫は篤志には逆らえなくなった。そして、篤志の親が親類の家へ行って留守になる時を狙って、篤志は薫を家へと引きずり込んだ。

『今日はうちの親、おらへんねん。……だから、泊ってけや。』

そんな風に話し、断るはずもないと言うように、薫の返事など聞かない。

夕方、まだ日は高く、外では子供たちの遊んでいる声すら聞こえる時刻。

部屋に薫を連れ込んで、篤志はカーテンを閉めた。

『薫……、服、脱げや。』

高圧的な、絡み付くような、低い声。

薫は幼い時からの刷り込みで、篤志には逆らえなくなっている。黙って、言われるままに、服を脱いだ。

中学生。まだ細く、肉付きも薄い薫の身体を、篤志は舐めるように見つめる。息の荒さから、興奮している様子が薫にも伝わった。薫はと言えば何の感情も起きてはこない。

肌寒いという気持ちと、異様な篤志の視線が怖いと思っただけ。『そこに……ベッドに寝てみよう。』

素直に応じる。……嫌だと言えば、良かったのかも知れない。

けれど、この頃の薫には、篤志に逆らう意思は、もう擦り切れてしまっていて。

何も考える事が出来なくなっていた。

『女とはちゃうけど……まあ、ええわ。』

まるで、獲物を食する螻蛄のように、篤志は薫を貪った。

それが毎日になったのは、高校に進学してからだった。

薫は地元の高校に行きたいと思っていたのに、篤志の命令では仕方なく、東京の有名高校への願書を出した。

二人揃って合格。篤志は、顔と頭の両方が良く、その上、スポーツも万能の、出来過ぎた男なのだ。

篤志の親が用意したマンションに、当然のように薫を住まわせる。……この頃から、篤志は薫をペットのように扱います。

毎夜のごとくに身体を求めたのは最初のうちだけで、すぐに飽きてしまう。

薫は従順で、単調で、刺激が足りなかった。

『……なあ、薫。お前、ここ出たら、どっか行く場所あるんか？』

俺、もしかして、他の奴、連れ込むかもしれんやろ？ そんな時の為に、どこぞで時間潰せるトコ、探すとけや。』

薫を抱いた後に、平然とそんな事を言うようになった。

ここは元々、篤志の親が借りてくれた部屋だ。薫は一銭も支払ってはいない。だから、そう言われれば、素直に頷くしかない。

『せやけど、他の奴のトコとかはあかんぞ！ お前の帰る家は、ここだけやねんからな！』

他の部屋へ泊りに行けば、きつと、他の奴が薫を食う。それは、絶対に許せなかった。

『どっか、公共の場所や。……そやな、オールナイトで開いてるトコな。』

横暴な要求でも、薫は黙って頷いていた。

そして、言葉の通りに古びたオールナイトの映画館を見つけ出してくる。

……何日くらい、この映画館で夜を過ごしたかは、もう、覚えていない。

泣ける映画も、そうでない映画も、薫は無反応にここで観続けた。いた。

ポップコーンを買って、ありあまる時間をぼんやりと過ごす……楽しいような、楽しくないような。

篤志に遠慮して、小さくなっていった背を、ふいに伸ばして欠伸をした。画面では恋人達が抱き合って、再会を喜んでいた。

『もう、帰ってもええかな……。朝御飯作らなあかんし……。』
呟いて、建物を出る。椅子で寝てしまって、少し首が痛い。

そんな夜も、幾夜。

そして、二年に進級した。

篤志は気紛れに、尻の軽い少年たちを、部屋へと招く。

その度に、薫は部屋を追い出された。

『ねえ、彼氏も誘ってあげて構わないよ？ 一緒に楽しもうよ。』

『あかん。アイツは誰にも見たらへんねん。俺だけの楽しみやねんから、ちよっかい掛けなや？』

くすくすと、忍び笑いで。

他の誰かと楽しみながら、頭に薫を思い浮かべた。

アイツはこない可愛い声は出さんなあ……、
けど、アイツの腰はもつと細いかなあ……。

あちこちで摘まみ食いを繰り返しながら、色々なタイプと薫を見比べて、悦に浸る。誰と比べても見劣りしない薫に満足した。歪んだ愛情だという自覚は篤志本人にも、薫にも、ない。

『薫、新入生にごつつ、可愛い子がおるんやて！

ちよい、見に行ってくるから、先、帰れや。』

耳打ちして、篤志はその場を立ち去った。取り残された薫は、黙って鞆に荷物を詰め込む。

心は、すでに凍り付いていて……。

篤志が言った言葉の意味も、よくは理解出来ていなかった。

ロッカールームのある正面玄関で、薫は篤志の姿を見る。大人しそうな、新品の制服を着た一年生と、談笑していた。

華やかな笑顔の、可愛い少年。ふと、薫は考えた。

……あんな風に笑った事があつただろうか……

とても楽しそうに……心の底からの、嬉しさを表現した笑顔。心がキリキリと痛む。

何か。とても大切なものを、無くしてしまった。

悲しみに涙が零れ落ち、それを他人は見つけて、同情してくれる。

『あんまり、見ない方がいいよ……、』

『酷いよね、新塚の奴、』

篤志と薫の仲は、とうの昔に知れ渡っていて……知らしめたのももちろん、篤志で、そうまでしても、薫が誰かと触れ合う事の邪魔をした。

教室での、堂々としたキス。一隅に追い詰めて、抱き締めて、皆の見ている前で、唇を奪った。

『コイツは俺のモンや！誰も手出しすんなや！』

激しさに、皆、引いてしまい、誰も薫には声を掛けない。高校生

活も、友達が出来ず仕舞いで終わる事を、薫は覚悟した。
仕方がない、と諦めてしまった。

篤志の独占欲の強さは異常なほどで、けれど、それはいつもたった一人に限定された。それがなぜかを考えれば良かったのに、篤志は問題にもしなかった。

そうして、薫は考えるより、忘れておく努力を払った。

篤志は浮気性だ。自身が浮気をするので、薫の事も心配で堪らないらしい。

誰も近付けさせないのは、そのせいだった。

他に彼氏が居るくせに、平気で篤志と寝る少年……そんな子の相手をした夜は、決まって篤志は薫に誓約をさせた。

『俺以外の奴は見るんやない、ええな？』

ついさつき、帰ってきたばかり……さっきまで、他の子の相手をしていたというのに、そんな時の篤志は酷く貪欲だった。

初めてのあの夜のように、薫の身体を貪り食らう。

『なんかあつたん？』

あまり言葉を話さなくなった薫と、それに気付くことさえない篤志の会話。

苛立っていると解かる時には自分から近寄ることさえなくなった薫に、篤志は何も気付くことがない。

些細な変化がいつしか薫のすべてを変えていたのに、気付くことはなかった。

とろんと、満足げに、眠たそうな目で問い掛けた薫。

『今日は食わんと帰って来たんや。……ム力つく奴やった。』
不機嫌な篤志の声が答える。

まだ名残惜しいのか、薫の胸に唇を這わせて所々に口付けの跡を刻んでゆく。

『ふうん……、』

もう時計は午前二時を廻っていて、薫は眠くて仕方がなかった。無防備に放った言葉を、篤志がなんとすることもなく答えた。それだけのこと。

恐れる理由さえないと、薫は気付けなかった。

空回りしてゆく日常に、どちらも気付けなかった。

雪は少しずつ止み始めている。時々、気紛れに降る勢いを増した。

電車は遅れているのだろうか、まだ到着しない。

小雪がちらつくくらいだ、とても寒くて、篤志は早くマンションに帰りたいと思っていた。

留守電を聞かなくてはならないし……もしかして、千尋からの返事が入っているかも知れないから、心が急いでいた。

まさか、別れを切り出されるなどは、思ってもいなかった。

「篤志……、最後に、自分に言わないかん事があるねん。」

急に、薫は口を開いた。

「なんや？ 改まって。」

「もう、連絡は一切入れへんから。……自分も、俺には連絡して来んというて。」

毅然とした口調。

一切を受け付けない強い眼差しで、薫は篤志を拒絶した。

「な……、」

「これも返す。……まあ、要らへん。」

そして、篤志に携帯を押し付けた。

一年の時、いつだったか、薫に携帯電話を持たせた。

学校ではいつでも捕まえておけるはずもなく、ちよくちよく、薫は所在が掴めなくなるため、便利のためにと篤志が持たせた。

いつでも、手許に呼び戻せるように。いつでも、すぐに来させるために、携帯はとても便利な道具となった。

最初に持たせようと思った時は、確か、そんな理由ではなかったような気もするのだが……、今が便利なら、まあいいか、とそのままにした。

深く追及すべき事柄を、篤志はことごとく無視してゆく。

『もしもーし、薫か？ あのなあ、今、屋上に居るんやけど、すぐ来いや。』

一時間目の授業が終わった後、すぐに薫を呼び出したのは、無性に薫を抱きたくて堪らなくなったから。

時々、こんな風にわけもなく、薫を確かめたくなった。

『なんや？ 篤志。』

もうすぐ、授業始まるで？』

『ええから、こっち来いや。』

喉に絡む声と、熱を持った瞳を見れば、どういう用件で呼ばれたのかはすぐに解かる。薫は諦めたように溜息を吐いて、篤志に近付いた。

どうせ、逆らう事など出来はしないし、逆らおうとも思えない。

ただ、篤志の言うように……篤志の言葉に従っていれば、それが正しい道であるような気がしていた。

自分で考えるのは面倒だと思うことにして。

こんなにも求められているならいい、と。

真実から逃げた。

『なんで、こんなトコでするんや？』

『スリルがあつてええんや。けど、誰か来たらマズイし、服は着たままでええな？』

そうは言っても、結局、薫は全てを脱がされてしまう。

確かめるための行為なのだから、隠しては無意味だと思ったらしい。

『篤志、』

どうせなら、篤志の肌にも触れたいと思った。

言えば良かったのだろう、そうすれば何かが変わったのかも知れない。

遮るように言葉を重ねなければ、薫は切っ掛けを掴めたかも知れない。

『あ、これ、昨夜の跡やで？ ほら、』

……もつと濃くしといたるわ。』
消え掛けた口付けの跡を見付け、さらに唇できつく吸い付けて濃くする。

『いやや……篤志、明日からプール、あるんやで、』

『あかん。お前の肌は誰にも見せたら……見せれんようにしたるわ。』

意地悪く言う言葉の種類が、変わってしまったのは、いつからだろう。

薫は変わることが出来ず、篤志の態度が変わってしまったのは。

「薫……お前、」

「俺、やっぱり大阪に帰って、向こうの学校に行く事にしたんや。」

「そんなん、勝手に決めたんか!」

「……篤志。」

お前、なんか勘違いしてへんか?」

むしろ、怒ったような顔をして、薫は篤志を見つめている。

「勘違い、って……なにを……?」

そう言われても、何も思い浮かぶ節がなかった。

「俺、お前の事、好きやったけど。お前は違おてたやんか。」

お前は俺を捕まえて、縛り付けて……、そんで飽きたから、他の奴に乗り換えたんやろ?

お前……、俺の事、好きやなんて言うた事ないで。聞いたこと、あらへんもん。俺はただの居候やったんやろ。前は違おたかも知れんけど、今はそうやろ。

……勝手に決めて、何が悪いねん?」

薫のこんな話し方を、篤志は初めて聞いた。

いつもは遠慮して、篤志の顔色を窺がって、それから確かめるように言葉を紡いでいた。こんなに饒舌に話が出来たのだと、新鮮に

感じる。

こんなに真っ直ぐに、自分を見る事などあっただろうか？
ドキドキした。

目の前の薫に惚れ直した。

「けど……っ、お前かて、納得してたやないか……、」
なんとか引き戻そうと、言葉を継ぎ足した。粘ってみたくなる。
別れを切り出された事はすぐに理解出来たのに、どういうわけか、
解からない振りを試してみたくなった。執着するなど、みっともなく
て嫌だと思っのに。

こんな風に話す薫の言葉を、もつと聞きたい。

はつきりとした意思を感じさせる、強い眼差しで篤志を見つめる
薫。

今まで抑えていた感情が爆発し、人形ではない本当の薫が、目の
前に立っている。

蝶が羽化する瞬間に、篤志は息を呑む。

「お前、前に言っただら？ ……恋人とはちゃう、って。」

あんな言葉が引き金になったとは、信じられなくて、篤志は息を
詰まらせた。

「あんな……あんなん、言葉の綾、やるが？」

好きでもない奴と一日中一緒に居られるかいや。

よお考えて言えや、薫。」

「篤志……、お前、俺をペットか奴隷やと思おとったんやろ？」

それとも、便利な家政婦か？ 抱き人形か？ ……ふざけとった
らあかんわ。

恋人やない、って宣言されて……。俺、あれで目え、醒めてんで。

薫は篤志を見据えたまま、にっ、と笑った。どこか寂しげで、悲
しげな笑顔。

「……俺は、何をしとるんやろ、……そお、思っただわ。」

従順に、主に従う盲目のシモベ……薫はちょうど、そんな感じで篤志の傍に寄り添っていた。

首輪を付けてもらった子犬は、とても嬉しそうに尻尾を振る。ちょうど、そんな感じ。

何も考えられなくなっていた薫に自我が戻ったのは、篤志の心ない一言からだった。まさか、篤志自身も、それが二人の蜜月を壊すとは、思ってもいなかったに違いない。

『あいつは、別に、恋人でもなんでもないんや。』

それは、言うてはいけない一言だった。

『薫……？』

『や……、篤志、ごめん、』

今日は勘弁して……』

昼の事を気にしているのか、と思うと、腹が立った。

なぜ、腹が立つのか。それを、考えるべきだったのに、考える事無く、怒りを薫にぶつけた。

『阿呆！ 俺はスタンバイや、もお、止まらへんわ！』

『やめ……！ 嫌や、篤志……！ 止めてや！』

抵抗するのは口先だけで、それもすぐに喘ぎ声に吞まれてしまうくせに……そう思うと、さらに薫を弄る手の動きは乱暴になった。

『やめてや、篤志、……やめて、』

泣きながらの抵抗が、何を意味するか。

それさえ考えられないほどに、篤志だけが変わってしまった。

諦めてしまった薫は、それから先の日々で、感情を表に出す事を止めてしまった。

それにさえ、篤志は気付かなかった。

順調にすべてが運んでいる、そう思い、思い上がっていた。

納得は、篤志の中だけの事だった……。

「お前……つい、数時間前に、俺とヤったんとちゃうんか？」

あんな、俺にしがみ付いて、ヒーヒー言うてたやないか……、「いつもと同じ夜が明けた。

いつもと同じに薫は篤志を受け入れて、朝を迎えて、篤志の為に食事を用意し、部屋を片付け……そうして、二人で過ごした部屋と想い出に、別れを告げて出てきた。

それを篤志は知らなかった。

「愛してもくれん奴に、いつまでもひつついて居れ、いうんか？」

そんなんやったら、お前なんかさっさと忘れて、ちゃんと俺を見てくれる奴、探すわ。」

せやから、別れる、言うてんのやろ、……薫の言葉はいつそ、容赦がない。

何か言わなければならぬ、そう思いつつも、篤志には言葉が見つからなかった。巧い台詞で、この状況のなにを変えたかったのか。言葉を搜しているうちに、また、薫が一言告げた。

「俺かて、いつまでも子供やないんやで。……お前の玩具やない。」

薫の決意は固く、揺るぎそうにもない。

イライラと篤志は機嫌を悪くして、ついに叫んだ。

「ほな、勝手にせえや！俺かて、邪魔者が居らんようになった方が、都合がええわ！」

余計な一言が加わってしまい、慌てて口を噤む。

薫を、傷付けてしまふ……今更のように、配慮というものを意識した。

そんなものは、もう、遅過ぎただけれど。

「……他に好きな奴が出来たんやったら、ええやないか。

今度はソイツ、捕まえて、飼おとつたらええねん。俺は、お払い箱やろつから、帰らせてもらっし。」

薫の言葉が、胸を刺した。

自分を忘れてしまいたいと言う。

他の誰かを愛したいと言う。

……千尋を同じように飼えばいい、と言う……。
ただ、篤志に捕まって、飼われていただけだ、と……。
便利だと思っていた。

ペットのようには思っていた。その心理を、知られていない筈などない。

知っていても、じっと、薫は我慢してきたのだ。

気付かない……解からない。考えられないフリをして。

「俺は、お前と離れたくないや。」

お前なんか、忘れて……人生、やり直すんや。」

睨むような眼差しのまま、薫の目には涙が浮かび、静かに流れ落ちた。

薫が起こした初めての反逆。最初で、最後の。

それは、篤志にとっては予想も付かぬ形で……狼狽えるばかりだった。

薫の口が言葉を紡ぐ。

「……お前は、悪夢やった。」

もう、夢から醒めてもええやろ……？」

瞬きもしない薫の目から、いつまでも涙は零れ続けていた。

一年生の気になるあの子……名前は千尋。

杉田千尋。恋に奥手で、ウブな美少年は、たちまち学校中の標的になる。

篤志は千尋を落とそうとして……うっかりと、籠の戸を開け放った。

「あいつは別に、恋人でも何でもないんや。」
鍵が壊れた。

微かに薫の胸に灯っていた暖かい火を、篤志は自身で吹き消した。
今までの年月が、薫にとっては悪夢となった。

感情を何処かへ置き忘れてきた薫……初めて取り戻したものは、

涙だった。

小雪がちらつく駅のホーム。人はまばらに集まり出した。俯いて、何を考えているのかも掴めない薫の横顔は、とても綺麗だった。

胸がキリキリと痛む。

千尋を見て憶えた、甘い疼きよりも……薫を失う切なさに、息が詰まる。

手を、掴んで取り戻そうとした瞬間に、薫の安堵した声が列車の到着を教えた。

「……あ、電車……やっと、来たわ。」

逃げてゆく小鳥。鳥籠を振り返りもしない。

本当に、終わったのだと、悟った。

3 (後書き)

とりあえず、序章終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3580y/>

なごり雪

2011年11月8日23時09分発行